芸術文化を感じる町の小さな美術館

津奈木町は芸術文化による水俣病からの地域再生を目指し、１９８４年から「緑と彫刻のある町づくり」を進めてきました。この取り組みの集大成として２００１年に開館したのがつなぎ美術館です。ことしで開館20周年を迎えるにあたり、現代美術家の柳幸典さんによるアート・プログラムをはじめ、さまざまな企画展が開かれます。

【特集】つなぎ美術館20周年記念

アートに、つながる。

この町に息づいた文化芸術の心――

「津奈木町といえばアート」。今やそんなイメージを持つ人もたくさんいます。本町はどのようにして、アートの町として息づき始めたのでしょうか。

水俣病からの地域再生を目指して

海と山に囲まれ、自然豊かなこの町では、漁業や柑橘類の栽培が盛んでした。スーパーが無い時代、漁師が魚を捕ってくれれば、その家族がリヤカーで販売し、山間部の集落まで届けていたそうです。

そんな中、1950年代に水俣・芦北地域は水俣病の被害を受けました。このことから、水俣病による健康被害はもちろん、自然と人とのつながりや人と人との絆が分断されてしまいます。アートで住民の癒やしと地域を再生したい。1984年、「緑と彫刻のある町づくり」の取り組みを開始し、これまでに町に16体の彫刻が設置されました。

2001年、アートによるまちづくりの拠点としてつなぎ美術館が開館しました。

みんながアートに親しめる仕組みづくり

有名な作家の作品展を開催する同館には、町外から多くの美術ファンが訪れました。しかし、開館して3年目に来館者アンケートを取ったところ、町民の利用が約3割だったため、町民がアートに親しみを持ってもらえる企画を検討。このとき、町が一方的に発案した企画では興味を示してくれないと考え、企画の段階から作家と住民が一緒に作り上げる「住民参画型アートプロジェクト」を2008年から始めました。実行委員はアートに興味があるかどうかではなく、地域活性化のために協力してくれそうな人たちにお願いしたそうです。

「赤崎水曜日郵便局」（2013～16年）は廃校になった旧赤崎小学校を舞台に、見知らぬ誰かの水曜日の出来事が書かれた手紙を交換する企画。その物語性が話題となり、約1万通の手紙が届きました。こうして本町は「アートの町」という地位を少しずつ、着実に作り上げてきました。

アートが町にもたらしたもの

アートによるまちづくりが始まって37年。津奈木町にどのような変化をもたらしたのでしょうか。同館の楠本智郎学芸員は「多くのアーティストや作品を通じてさまざまな価値観や視点に触れる機会が増えたと思います。アートだけの影響ではないでしょうが、地域での活動や表現が多様化し、以前にも増して新たなことに挑戦する人たちが増えてきたように思います」と語ります。

多くの人、物、場所をつなぐ能力を秘めている「アート」。今後もつなぎ美術館は、展覧会や住民参画型アートプロジェクトを通じて、日常における美術の可能性を追究しながら地域の活性化に努めていきます。

つなぎ美術館の歴史

昭和59年	4月、町全体美術館構想策定
平成11年	11月、つなぎ美術館着工
平成13年	4月、つなぎ美術館開館
平成14年	2月、アートポリス推進賞選賞受賞
平成20年	5月、「住民参画型アートプロジェクト」開始
平成25年	4月、「赤崎水曜日郵便局」プロジェクト開始
平成26年	1月、つなぎ美術館が地域創造大賞を受賞
	6月、「つなぎの根っこ」プロジェクト開始
	9月、「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」開始
	11月、「赤崎水曜日郵便局」グッドデザイン賞受賞
平成28年	1月、「赤崎水曜日郵便局」単行本発売
平成29年	10月、「西野達つなぎプロジェクト」公開
令和2年	12月、「アーティスト・イン・レジデンスつなぎの軌跡」公開
令和3年	1月、《入魂の宿》が「みどり香るまちづくり」企画コンテストで日本アロマ環境協会賞を受賞
	9月、「柳幸典つなぎプロジェクト成果展」「ユージンスミスとアイリーン・スミスが見たMINAMATA」開催

アーティスト・イン・レジデンスつなぎ【2014-19】

津奈木に住み、感じ、描く。

美術によるまちづくりと収蔵品の充実を図るため、地域交流型制作と個展を組み合わせた企画として毎年1人の作家を招いてきました。作家は約4か月間、津奈木町の空き家を利用した住居で暮らしながら、美術館での個展開催を目指して制作。

月に1回程度、地域へ向けたワークショップを開き、住民と交流しながら自身の制作に関する情報やアイデアなどを探しました。滞在中に制作した作品の一部は町内公共施設で展示しています。

PICK UP!

津奈木町婦人会

館内の受付や喫茶店運営、舞鶴城公園までへのモノレールの運行などは全て地元婦人会が町から運営を委託されています。「お客さんとおしゃべりするのが楽しくて。アーティストもみんな友達なんです」と語るのは、婦人会長の石田ミサ子さん（桜戸）。美術館が建てられる前はアートに興味がなかった皆さん。「アーティストが来てくれたから、住民同士の輪も広がり、津奈木の良さを再発見するきっかけとなりました。遠くに出かけるときも美術館に行くようになりました」と話します。

美術館のベランダで婦人会が育てた植物。地域住民に株分けし、各家庭で世話を続けた後、《入魂の宿》の作品の一部として使われます。

Interview

ここがすごいよ！津奈木のアート

これまで10年近く全国各地での滞在制作や海外でも作品発表を続けてきましたが、津奈木町のアートの取り組みは世界的に見ても他に類をみない活動が多くあります。国際的な芸術祭や一般的な美術館では入館者数や経済効果が評価基軸となることがありますが、一時的な経済効果や数字を追い求めるだけのあり方に以前から私は疑問を感じていました。コロナ禍を経て、今までのように何万人来場だから盛況、というような考え方は通用しなくなってくると思います。津奈木町のアートの試みは今後これからより一層大切になっていくのではないかと確信があり、アートによるまちづくりに関して初の移住者となることに決めました。作品を通して町の魅力を伝える担い手の１人になりたいと思います。

地域おこし協力隊（住民参画型アートプロジェクト業務担当）
大平　由香理さん（大泊）

柳幸典つなぎプロジェクト成果展 2021 Beyond the Epilogue

石の割れ目から聞こえる言霊（ことだま）

柳幸典つなぎプロジェクトの3年目の成果展が、9月11日(土)からつなぎ美術館で始まりました。社会問題に独自の視点で切り込む作品で知られる柳さん。事前調査で町を訪れたときに、水俣病の惨状を描いた作家の石牟礼（いしむれ）道子さんや写真家のユージン・スミスさんの作品を展示する施設がこの地にないことに衝撃を受け、石牟礼さんの文学にちなんだ大型展示を企画。石牟礼さんの詩などを基に役場近くの森で《石霊（いしだま）の森》、旧赤崎小学校舎を利用した《入魂（にゅうこん）の宿》を手がけました。

《石霊の森》は、石の中から言霊（ことだま）が聞こえる様子を表現した作品。利用されなくなった憩いの森とそばに放置された無数の石から着想し、さまざまな形の石を人間の多様性に重ね合わせています。石に近づくと被害者の語りや町民による石牟礼さんの詩の朗読、郷土民謡「平国六方踊り」の演奏と歌が聞こえてきます。この踊りは約200年前から伝わったといわれ、力自慢の侍が刀を抜いて喧嘩しそうになるのを、別の侍がなだめて仲裁する物語。水俣病をめぐるさまざまな問題にもつながると思い採用したそうです。

《入魂の宿》は旧赤崎小学校のプールと周辺を宿泊施設に改修。水中に下るスロープも付け、海の浄化が自然界の微妙なバランスで成り立っていることを体感できるそう。敷地内には再生した海や空の景色を取り入れる作品を設置し、公害を見つめ瞑想に浸る空間を新しく作り出します。作品名は石牟礼さんの詩「入魂」から引用。柳さんは「『海に魂が入る』と表現するところの海と天が結び合う瞬間を描いた美しい詩の世界を、地域資源の再生で造形できれば」と語りました。

《石霊の森》に響く地域のさまざまな事象を伝える音を時間をかけて収録

石の配置を終えた後も重機械による細かい作業が進む《石霊の森》

《石霊の森》で柳さんの指示で重機械で大小さまざまな石を配置

柳幸典つなぎプロジェクト成果展 作品紹介

石霊（いしだま）の森

津奈木町役場近くに植林されていたイチョウの森と、同じく利用目的がなく保管されていた大量の玉石を利用し、鉱物と植物そして人間の言葉を組み合わせて造園するプロジェクト。

四季と共に変化し成長していくイチョウの森の中に点在する大小さまざまな形の石の割れ目から、老若男女による石牟礼道子さんの詩の朗読などがひそかに聞こえてくる。それら珠玉の言霊は、まるで硬い石の封印から解き放たれたかのようである。

柳幸典《石霊の森》2021年

入魂（にゅうこん）の宿

旧赤崎小学校のプールとその周りを芸術体験ができる宿泊施設として改修し、敷地全体をアートで再構成するプロジェクト。プールを再活用することで、小さな動植物たちの箱庭的生息空間を育てると同時に、自然環境の壊れやすさについて体感してもらうための装置として機能するように設計。「入魂の宿」の名前は石牟礼道子さんの詩「入魂」から引用。2022年度からは期間限定で1日1組の宿泊ができる予定。

《入魂の宿》イメージ図 制作：工学院大学樫原研究室

10月下旬公開予定で工事が進む《入魂の宿》

《入魂の宿》に住民と美術館が育てたハーブなどをみんなで一緒に植樹

美術館 YouTube チャンネル

動画公開

新型コロナウィルスの影響で、無観客で行った「柳幸典つなぎプロジェクト成果展 2021 Beyond the Epilogue」関連企画の「対談 姜尚中×柳幸典」。10月中旬に美術館 YouTube チャンネルで公開予定です。右のQRコードを読み取ってください。

ユージン・スミスとアイリーン・スミスが見たMINAMATA

半世紀前の日常を写す

公式確認からことしで65年となる水俣病。映画「ＭＩＮＡＭＡＴＡ」で再び注目されている写真家ユージン・スミスさんと妻アイリーン・美緒子・スミスさんの写真展が9月11日(土)からつなぎ美術館で始まりました。

２人は１９７１年から３年間、水俣市に暮らしながら患者を取材。１９７５年に刊行した写真集「ＭＩＮＡＭＡＴＡ」は大きな反響を呼び、水俣病が世界で広く知られるきっかけとなりました。

会場には、ユージンさんの助手だった石川武志さんが夫妻を撮影した作品や写真集に入っていない水俣の日常を捉えた未発表の作品など83点を展示。ユージンさん自身の姿を収めたものや漁船の上で朝食をとる漁業者など、海の恵みと共に生きてきた人々の姿が紹介されています。

アイリーンさんは「水俣病は過去の問題ではない。改めて事実を若い世代に伝えることが大切。この地域で写真展を開くのは大変意味があると思います」と話していました。

Photo by Aileen M. Smith
©Aileen Mioko Smith

Photo by Aileen M. Smith
©Aileen Mioko Smith

Photo by Aileen M. Smith
©Aileen Mioko Smith

五十嵐靖晃アートプロジェクト「つなぎまちのつなぎかた」

海と陸をつなぐ百本の糸

9月18日(土)～20日(月)、五十嵐靖晃アートプロジェクト「つなぎまちのつなぎかた」で展示する作品《海渡り》の制作実験が旧赤崎小学校近くで開かれました。住民のべ40人が参加し、弁天島の鳥居と陸をつなぐように100本の糸を張っていきました。

弁天島は赤崎地区と干潮時に陸続きになる島で、頂上に海辺の集落を見守るように弁天様がまつられています。明治時代にはすでに執り行われていたとされる集落の「弁天様のお祭り」は、近年は高齢化などで継承が難しくなっていました。

《海渡り》は、古くから地域に伝わる弁天信仰を住民と共にアートの力で再構築し、人々と協力しながら後世に受け継いでゆくことを目指す新しい形のアート作品です。

五十嵐さんは「島を往来する人々の歩みの軌跡を糸に乗せて形にしたかった。アートがきっかけになって町の魅力が掘り起こされ、自分たちで再確認しつつ外に発信していきたい」と話していました。

《海渡り》作品公開

【期間】10/11(月)～29(金)

【場所】旧赤崎小学校近く

※その他イベントなど詳しくはつなぎ美術館HPをご覧になるか、右のQRコードを読み取ってください。

住民有志が100㍍の糸を100本準備

干潮時に糸を持って島まで渡りました

陸と島の間に赤い糸を張る五十嵐さん